OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪公衆衛生協会を語る
Author(s)	庄司, 光; 中山, 信正; 橋本, 道夫 他
Citation	大阪公衆衛生. 1963, 11, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪公衆衛生協会を語る

公衆衛生協会の草わけ時代

北田　大阪公衆衛生協会とはこういうものだということを会員始め大阪の公衆衛生の関係者に理解していただいて，さらに会の発展に役立たせようというのが今日の座談会の目的でございますのでよろしく。まづ協会は昭和29年に発足したのですがその草分けの頃の模様を中山さんから……。

中山　たしか昭和25年だと思いますが，「結核を語る会」というのが誕生しまして，今村先生はじめ行政関係者も加わったその方面の熱心な方々によるボランタリーなグループ活動が，朝日新聞社の来賓室をかりたりしておこなわれていましたが，これが阪大の関教授の精力的な努力で，「公衆衛生を語る会」に発展し，公衆衛生で活躍している各職種の人々が参加して公衆衛生全般の問題について討論をするという形に発展したわけです。一方，東京に生まれた日本公衆衛生協会から各府県にその支部の結成をうながすための趣旨書が当時流されていたのですが，この「公衆衛生の会」を発展させて，大阪での支部的な組織としてはと考えられたわけです。当時は府市の間がしっくりしていなかった頃で，しかも会の名前として「大阪府公衆衛生協会」というような仮称が考えられこれでは府の外部団体ではないかというようなこともあり，全体の意見が一致する気運は仲々熟さなかったのです。私たちも，自主性のある，自由に討議できる会でなければならないと希望していましたが，そういう状況のなかで渾身の雄をふるって大阪公衆衛生協会発足の道を開かれたのが当時府の衛生部におられた橋本道夫さんです。

庄司　当時は，人員不足もあつたが，公衆衛生が沈滞した頃で，現場と学界との結びつきもたしかに浅かった。そこで，広範なボランティア活動の必要性と，大学が現場の問題に冷淡だったのを打ちくだくべきだという関教授の考えとを実現するものとして，関係者の努力によつて，若い医師，保健婦，監視員の方々を主な対象とした「公衆衛生を語る会」が運営され，非常に自主性ということに，会の運営上の注意がはらわれた。昭和32年に大阪で公衆衛生学会が開かれたのが契期となり，すでに発足していた協会の活動にも，この「公衆衛生を語る会」の精神が盛り込まれていったわけで，この自主性ということが他の会とは違う，大阪公衆衛生協会の特色であるということができるのではないか。

苦難の道の創生期

橋本　大学と保健所との研究はおのずから違った肌合いをもっていますから，昭和23年から始められていた保健所学会も，大学の参加という面では部分的なものにしかすぎませんでした。また，自治体の財政も苦しい頃だったし，みんなの不平不満も多かった頃ですが，学界や現場，あるいは職種などにこだわらないで，公衆衛生にとりくんでいこうと主張されていた関教授等の努力と庄司先生の名司会（笑い…）が，「公衆衛生を語る会」を育てたわけで，したがって当時協会結成については，官制的だという警戒心が根強かったことは事実です。

しかし，話し合っているだけや，つぶやきだけでは駄目で，専門団体ががっちり横に組まねばならないという反省と，むりやりな統合をはかってはいけないが，全国組織と結びついた組織を確立することの必要性を感じ，昭和30年から石橋部長

の指示をうけて私は一応発足していた協会の組織の確立化に走りまわりました。

中山　庄司先生が協会にタッチされることになったいきさつというのを（笑い）。岡山の話…。

庄司　ソウソウ。岡山の学会ネ。僕がチビチビやっとった時に関君が現れて，日本の公衆衛生をどうしようと怪気炎をあげたんですョ。官制では育たない。学者，行政がお互いよそイキの顔をしているのではいかんとネ。それからですよ。

「大阪公衆衛生」の第一号に小歴史というのを関さんが書いておられるが，当時は資金もないので，プリントの金も朝日の厚生文化事業団の賀集さんから援助をうけていたくらいで，みんな全く手弁当での活動でしたね。その頃の若い人がみな今の中堅になっておられるでしょう。

北田　協会は技術系の人を中心として出発していますが，事務系の人の参加についてはどういう考え方があつたのでしようか。

橋本　事務の人のかかえている問題，声というのは勿論ありましたが，学会の資料として記録されているのは，奥山さんが予算の問題を行政部会に出されたのが最初ではないでしようか。

北田　猫西さん，当時の若手を代表してひとこと……。

若手には不平不満の発散場

猫西　「公衆衛生の会」に出れば，大学の先生とも自由にものがいえ，不平や悩みも聞いてもらえる，雲の上の人のように思っていた先生方と話しができるということに非常な幸福感をもっていました。また，不平不満の発散場として気持の安らぎをそこに求めました。当時あの会がなければ，今の中堅の多くがやめていたのではないかと思いますね。

北田　会員の半分をしめる保健婦さんの動きはどうでしたか。

表谷　占領政策による保健婦再教育で，どんどん東京から新しい考え方が教示されても，どなたにもなかなか分かってもらえなかったのですが，こうしたもんもんの情を，「公衆衛生の会」で，いろんな職種の人の集まった中で，たとえそれが現場では解決できなくとも，発言するだけで救われた気持になれるような，そういう方向に皆さんがひっぱっていって下さいました。

庄司　「公衆衛生を語る会」の方がクローズアップされているが，昭和33年までの本体の協会の方はどうしていたのかね。

中山　府の医務課長の鶴崎さんが近畿保健所学会と公衆衛生協会の学会を一緒にという提案をされたが，所長会にソッポをむかれるという状況でした。また京都での保健所学会の翌日，大手前で第一回の公衆衛生地方討議会が開かれましたが，橋本さんが協会の体質改善にのりだされるまでは，この討議会が協会の唯一の事業でした。

協会活動が軌道にのる

北田　協会が実際にその機能を発揮しだしたのは，日本公衆衛生学会が大阪で開かれた32年頃からということですね。

橋本　協会発足に際し，府の補助金がでて，発足後しばらくの間は協会独自の活動でなしに公衆衛生関係の各種団体の事業に対して，積極的に援助するという形で活動していましたね。

語　る　人

出席者	庄司　光	（京都大学教授）
	中山　信正	（大阪市予防課長）
	橋本　道夫	（大阪府環境衛生課長）
	表谷　シズエ	（〃　医務課主幹）
	猫西　一也	（大阪市食品衛生係長）
	足立　芳邦	（〃　保健所係長）
司会	北田　章	（大阪府・吹田保健所長）
記録	三浦　康男	（大阪府医務課総務係長）

中山　当時橋本さんは，既存の各職種の組織をただいたずらに協会へ吸収してしまうんだというような気は毛頭ないと大いに説得されたのですが，お互い仲々信用しなかったですね。

足立　官制の協会なんぞに入る必要はないというムードが，私たちにも相当ありましたね。

猫西　それが千尾課長が機関誌の発行に力を入れられた結果，その機関誌を通して協会のすがたも漸次認識されだんだん不信感がとれていったと思います。

中山　まず部会活動が開始され，また毎月の部会長会議なども活発に行なわれましたね。

庄司　下地があったからね。若い人も入ってやるという。

橋本　「公衆衛生の会」の時代に比し財政的にも筋ができて活動しやすくなったし，会合のたびに一般の市民も入って討議したから，各種の問題が非常に具体的に表現されていきましたし，協会として大いに活躍したと思います。最近の学会をみていますとその頃とはちよっと変ってきていますね。

6 つの専門部会が誕生

北田　昭和32年の大阪での公衆衛生学会のあと，協会内部組織として専門部会が確立し，衛生行政，予防，医療保障，看護，食品環境，衛生教育の６部会による研究調査活動が発足したのですが……。

庄司　部会長会議が協会活動の中心母体となったわけです。私の方は昭和33年１月に環境食品衛生部会を結成したのですが，すでに職能別の団体もあったので，部会活動としては，単なる懇親会的なものからは発展して，関係者の質を高めていこうというので研修会活動に重点をおきました。

今村先生が，公衆衛生学会は行政に基礎をおいた学会でなければ特色がないではないかといわれるのに刺激を受け，関さん，私らが奔走して準備した大阪の学会でのあり方がきっかけとなり，その特色が今も受け継がれているのですが，具体的には公衆衛生従事者の教育訓練の問題などが部会の大きなテーマとなりました。ただ，一般の人との接触が消極的で，公衆衛生大阪大会の分科会での接触以外，どう日常活動としてとり入れていくか，解決していない点が反省点でもあり，さらに部会として次の飛躍を考えねばならないと思っています。

猫西　大阪での学会参加の準備段階で，研究の方法論　まとめ方を指導していただいたことや，あるいは関先生の英国における監視員組織についての帰朝講演などが，その後の市の食監組織なり，近畿食監会議などの発展の足がかりになっています。

中山　私は初代の衛生行政部会長ですが，部会長を引き受けたのは総合的な分野を受持つ部会の活動が必要だということと，公衆衛生従事者自からが，その組織を見つめ討議する必要が感じられ，そのためには部課長より保健所長の方が自由な発言が可能だろう，また私自身，府県の〝保健所と政令市の保健所の問題〟豊中のような一市一保健所の問題など，もう少し保健所の性格をはっきりさせたいという希望もあり，引き受けたわけで，１年たらずで転勤となり，現在の部会長の井田さんにバトンタッチしましたが，もっぱらそういう問題についての研究討議を計画しました。

事務系の参加しやすい行政部会

足立　行政部会は総合的な立場ということから，これからは各部会から必らず連絡幹事とでもいうような人に入ってもらうと同時に，実際各部会の連絡調整もやっていこうと相談しているのですが，なかなか部会活動を推進することはむつかしいですね。

北田　協会の構成メンバーとしては弱体な事務系の人に一番参加を求めやすい部会だと思いますが。

足立　たしかにそうですが，ただ組織的な集りとならないのが問題ですが，できるだけ若い人に多く参加していただいてその中心になっていただこうと思っています。事務系の人がどんどん参加していただくことは協会にとって大事なことです。

表谷　私の方の衛生看護部会は対象もはっきりしていますし，人数も多いのですが，職能組織がすでにあり，活動していますので，どのような特色を出すかということに苦心しました。大阪の保健婦活動の歴史を勉強したり，教育訓練の問題をとりあげたりして，昨年までは八木部会長に熱心にリードしていただきました。最近ではできるだけ職場の若い層に委員として参画していただいて清新な運営ができるように努めています。

中山　予防部会の方は対象がはっきりしないし専門的で範囲も広すぎるので，講演会を開くなどで，この１，２年なかずとばずでしたが，このほど大和田先生が部会長に就任され，年間計画をつくったりして張切っておられます。協会のなかでは一般市民とのつながりをもつのに，案外とり組みやすい部会ではないでしようかね。

北田　医療保障部会，衛生教育部会，36年にできた学校保健部会については紙上参加をいただくことにいたしましよう。（おことわり…紙面の都合により紙上参加分を省略さして頂きます。すでに発刊した機関誌「大阪公衆衛生」をお読み願います。）

中山　部会活動以外の面も紹介しては。

北田　協会自身の動きとしては公衆衛生大阪大会の開催，機関紙大阪公衆衛生，公衆衛生ニュース，英文資料の発行，協会主催の講演会の開催，大同生命との提携による基金募集などです。

中山　そのほか公衆衛生大阪地方討議会というのがありましたね。昭和31年の名古屋での学会の前に，たしか第１回目の気勢をあげたと思います。この地方討議会も36年までで，それから日本公衆衛生学会近畿地方会に移行し，保健所学会も合流しました。

北田　財政面では主に府の補助金と会員費でまかなわれていて，市からの援助については，広島局長らの非常な努力をいただいたのですが……。

中山　そう，長い間市は片身が狭かった（笑）が，昨年からやつと市でも予算化された。

他府県に理解され にくい大阪の特殊性

北田　昭和33年に厚生省入りされた橋本さん，東京からみた協会活動の印象を。

橋本　ザックばらんにいって，大阪の特殊性というものはよその人には仲々理解されないという事が第一点。大阪独特の住民や社会の雰囲気を，よその人は分っていないということを，大阪の人がまず知る必要がありますね。第二に東京と比べて，東京では個々の専門の分野のかたまりが盛んであるが，その点が大阪では薄弱で，それが，またゆきづまりの根っ子になっているように感じます。学界からいうと理論体系をかためて高度に分化していく方向がでていない。三つには，市民との結びつきを強調されるが，それがどのように発展するかは考えておく必要がある。巾は広がっていくがだんだん稀しやくされていく要素がある。つまり専門的でなくなるというようなところがあります。

学界と現場とフリーに話し合えるという非常にうらやましい形は，よそでは仲々実践しようにもできないことです。しかし反面大阪では仲間だけで気勢をあげているだけで外からは入らない。たとえば建築とか土木とか他の学界と横に組むということがない。独自性を強調する余り，ある面では排他的であるのが，いい面でもあり，欠点でもある。

庄司　つまり大きな視野で専門家として成長せよということだね。地理的な面，学者の数といったものもあるが。

北田　第三者の立場で，みられた橋本さんの印象というものが，とりもなおさず協会の問題点でもあるわけですが，そこで最後の話題としまして，会員をいかにして広く獲得するか。専門部会

活動をいかにのばしていけばよいか。現場と学界の結びつきが現在でも堅持されているか。など協会のあり方や今後の問題について御意見を。

庄司　難問題だネ。10年目だネ。そういう意味で反省の時期でもあるが，学界と現場の提携も歴史的にはできてきたと思う。われわれの部会からみれば，自主組織がかなり成長して，研究も行われ，ある程度のびたために，食監だけでの研究としていないで学界との交流をもう少し考えないと益々せまくなっていくのではないか。

会員にしても従事者だけでは，狭さもあるし，またいままでは会員獲得の努力も足りない。雑誌の出し方についても実績がまづいと思う。大会の分科会をみても，一般の人のレベルを上げることの必要性を痛感する。これには日常活動を通じてやることが絶対的必要条件だ，力量も問題だが，ボランティアの精神が大切だね。

個性的な研究の段階へ

中山　相当巾広い会員層にもっていくか，会員がスポンサーシップをもっていくか。どちらがよいかは研究課題だ。

協会としては，あるテーマについてはっきりした意見を出せる個性的研究を打ち出す頃ではないですかね。コレラの問題にしても協会としての態度が示せるような動きをしなければならない。専門部会でも声明書が出せるような……一寸むつかしいが。

庄司　そこまでいかんと本式にならない。行政にエキスパートが片寄っている。会員層を拡め指導性のある一般人，開業医をも含めてね。仲々むつかしいが，準備時代だ。リコメーションを出すとすれば，結びつきを努力する時代と違うか。専門家だけがいっているのでは底が浅い。

猫西　添加物や洗剤問題などで経験したように，研究所の一人の人間の主観が強くジヤーナリストによってキヤンペーンされるという時代だ。相当の識者が納得してキヤンペーンしていくことが，一般の人に対し，公衆衛生に信頼感をもってもらえることとなるのではないか。

夢多い今後の指向

足立　協会にとっては今年ぐらいが転期と思うが，今年の大会からも，そういう方向が指向されているように思う，そのためには従事者の一部だけの協会であつてはならないし，また弱点である事務系の加入も積極的に促していく必要があると思う。また公衆衛生は行政だけでは浸透しない。下からのもり上がりが是非必要だ。

庄司　協会がそれを果さねば。内部の研修だけでなく，そういう方向のとれる部会から始めるべきだ。監視員は地域のレベルを引き上げる力をもっている。保健婦もだ。だしおしみをしないで，指導者のレベルアップを考えねばならない。従事者だけのレベルアップをしても，いつまでもこのままだ。持っている力をみんな出せということだね。今は新聞が一般の人を指導している。

中山　それとね。協会の財政的確立後は，資料センターとかライブラリーとかをぜひ確保したい。

橋本　今までの協会は，健康のイメージをひろげてきた。今後は仲間だけでなく，たたかれてもいいから外との接触をもつべきだ。市民と一緒になって考えると同時に，専門家のいっている事を解釈してやる必要があると思う。一般の人は分っていない。

それから，従事者同志の話し合いもこの一年に大阪の公衆衛生がどう変ったかというようなテーマで，年に２日や３日は集ってレポートを出すべきだ。そんな気慨が稀薄になっているように思う。大阪が口火をきらないと他はやりませんよ。つまり専門的なコミユニティーとしてのやり方をのばすということにと。市民に解釈をしてやるということ。行政にしばられないイメージを基本にして一緒に話し合い市民のリーダーをのばすということ。

（以下18頁へ続く）

大阪公衆衛生を語る（座談会７頁より続く）

表谷　看護部会は一番視野の狭い部会と思うが，保健所では便利屋になっていて方向を見失う。関連の部からも指導をうけたいと思うが横の連けいが今まで悪かった。大阪市における保健婦はどうあるべきかということも大問題だと思います。

中山　保健所の今の一番の問題は何かときかれてもすぐに答えられない。焦点が分からないといった今の状態ね，問題のキーポイントをつかむ頭の整理が必要だね。

庄司　そういったものを協会の機関誌に切実な問題として，率直にのべさせればよい。

猫西　それに協会として年に１回は，新人を研修するような講座をもつとか。部会が広く講師をあっせんをするとか。研修所のようなものがほしいですね。

北田　なかなか語りつくせませんが，この辺で…。どうも皆さんありがとうございました。

（とき：10月７日　　ところ：府職員会館）